

# 日独比較文化から見る「なじみのないもの」の翻訳手法 ——日本マンガ『よつばと！』のドイツ語訳における「セミ」

Zur Übertragungsstrategie für *die fremden Dinge* in der Sicht der japanisch-deutsche vergleichender Kulturforschung.

*Zikade (Grille)* in der deutschen Übersetzung von dem japanischen Manga *YOTSUBATO!*

大塚 萌  
OTSUKA Moe

**要旨** 本論ではドイツ語に翻訳された日本マンガのテキスト比較分析を行う。作品に登場するものには、日本ではなじみの深いものであっても、翻訳版受容側の文化にとってはあまりなじみのないものも含まれる。それらを翻訳する際に、どのように翻訳語が選択されているかを本研究では分析する。また、翻訳語選択の背景となる文化はどのようなものかを先行研究から考察する。分析には、『よつばと！』を用いる。対象となる要素は、「セミ」に関する語とする。先行研究から、ドイツにはセミは生息しておらず、鳴く昆虫という程度の認識しかないことが明らかになった。『よつばと！』の翻訳例においては、「Grille」と「Zikade」を文脈に合わせて使い分けられていることが分かった。さらに単なる翻訳語の使い分けという問題ではなく、単語の対応関係の構成変更やオノマトペ翻訳、文字テキストからの要素削除の問題も関わることが分かった。

## 1. 序論

ドイツで日本のマンガは活発に翻訳出版されている。マンガ翻訳に際して、文化の違いや語彙の違いによって様々な問題が生じる。そこで翻訳出版社及び翻訳者は様々な工夫を凝らしていると考えられるが、そこには受容者である読者の認識が多大に影響することになる。

本論では、翻訳版を読む読者にとって明らかになじみのないモノを翻訳する際にどのような訳語が選択されているのかについて、その背景に存在する文化をふまえて分析を行う。本論の対象作品は、『よつばと！』とし、その中の「セミ」に関する語の翻訳を取り上げる。

まず、2章では作品のあらすじを紹介し、さらに作品の中でセミがどのように登場するかを追い、中でも「つくつくぼうし」の特殊性について見る。3章では、「セミ」に関する語の翻訳背景として、ヨーロッパにおけるセミの生息域と『イソップ寓話』に登場するセミの翻訳について考察する。4章で実際の文字テキストにおける、「セミ」に関する語の翻訳例を日本語版とドイツ語版とで比較する。

## 2. 方法

対象の作品は、『よつばと！』（あずまきよひこ著/アスキー・メディアワークス刊）とし、「セミ」に関する単語を取り上げる。ドイツ語版の「セミ」に関する語の翻訳例を採取し、どのような語が使用されているか、どのように使い分けられているかを分析する。さらに語の使い分けによって、「セミ」に関する語の理解がどのようになっているかを分析する。

本論における対象テキストは、吹き出しに入ったセリフ、吹き出し外に書かれている発話されたセリフとし、まとめて文字テキストと呼ぶ<sup>1)</sup>。また、文字テキストを引用する単位は基本的に吹き出しとし、日本語版を基準とする<sup>2)</sup>。一つの文が2つ以上の吹き出しにまたがっている場合は、それぞれの文字テキストを“//”で区切って表す。

## 2.1. 『よつばと!』のあらすじ

『よつばと!』は2003年からアスキー・メディアワークス社で刊行されている、あずまきよひこによるストーリーマンガである。

主人公である5歳児の〈小岩井よつば〉<sup>3)</sup>が、夏休みが始まる前日に〈とーちゃん〉とともに引っ越してくるところから始まる、日常の発見や感動を描いたコメディである。幼児特有の自由な発想や子供らしい言い間違い・勘違いが全編にちりばめられており、周りの大人たちや子供たちの反応とともに物語が進む。2015年11月現在、12巻までが発売されている。

そのドイツ語版、*YOTSUBA&!*はTOKYOPOPによって、2007年から翻訳出版されている。2015年現在、ドイツ語版も12巻まで翻訳出版されており、一貫してMarcus Wehnerが翻訳している。

## 2.2. 『よつばと!』の物語におけるセミ

物語の中でセミは、夏の象徴として描かれている。隣家の家族の次女、〈風香〉が「やっぱり夏はセミだよねえー」<sup>4)</sup>と〈よつば〉に向かって言う場面があったり、一話丸ごとセミ捕りがテーマになっている1巻第6話「よつばとせみとり」<sup>5)</sup>があったりする。

第6話においてセミ捕りに行くきっかけとなったのは、隣家でスイカをふるまわれている〈よつば〉と隣家の姉妹の三女〈恵那〉、隣家の母親の〈かーちゃん〉の会話場面である。〈かーちゃん〉が「窓を開けてるとセミの声も聞こえるし//風鈴も鳴るし……夏らしくていいのよ」と説明するのを〈よつば〉が聞いて、〈よつば〉がセミが好きであることを表明した後、突然立ち上がって「いくぞえな//せみとりだ!」と宣言する<sup>6)</sup>。

この物語において、一般的なセミと、その中の一種のつくつくぼうしは明確に区別されている<sup>7)</sup>。さらにつくつくぼうしという単語は、〈よつば〉の勘違いによって夏の妖精のようなものとして理解される「つくつくぼうし」と、昆虫との2種類が混在している。このような事情のある『よつばと!』が翻訳される際には、その区別が理解できるように翻訳される必要があると考えられる。しかし、日本においては、セミという昆虫とその主な種類の名前は一般的であるが、ドイツではそうではない。その条件の下で、セミの中のさまざまな種類の区別を翻訳に反映することが場面の読解上求められる。このような訳し

1) マンガの画面の中の文字の分類について、詳しくは大塚(2015)で行っている。

2) 日本語版の吹き出しを基準とするため、ドイツ語版の文字テキストが前の文から一続きになっているにもかかわらず分断されて引用される場合がある。

3) 人名については〈 〉でくくって示す。ただし、文字テキストの引用についてはカッコを付与しない。

4) あずまきよひこ(2003)『よつばと!』1巻、アスキー・メディアワークス、p.33

5) あずまきよひこ(2003)『よつばと!』1巻、アスキー・メディアワークス、pp.173-204

6) あずまきよひこ(2003)『よつばと!』1巻、アスキー・メディアワークス、pp.175-177

7) セミの種類に関する語として、他にみんみんゼミやあぶらゼミなどが現れる場面がある。

分けの必要性を実際の翻訳ではどう解決しているだろうか。

物語の中でつくつくぼうしが他のセミとは明確に区別される理由、また〈よつば〉の勘違いとは次のようなものである。

物語が進んで夏の終わりが見えてきたころを描く4巻第24話で、買い物に行く途中でつくつくぼうしが鳴いているのを〈よつば〉と〈とーちゃん〉が聞いている場面がある。〈とーちゃん〉が「あいつ（=つくつくぼうし）が鳴くと夏が終わっちゃうんだよ」<sup>8)</sup>（カッコ内注記は大塚による）と説明したのを聞き、〈よつば〉はつくつくぼうしは夏を終わらせることができる妖精のようなものと勘違いしてしまう。

〈よつば〉の勘違いが物語の上で明らかになるのは、第24話と第25話の間に挟まれている4コママンガ形式の「よつばと4コマ」の中の「正体」というタイトルの4コマ<sup>9)</sup>である。絵を描いている〈よつば〉に〈とーちゃん〉が「何描いてんだ？」と問いかけると、〈よつば〉は「つくつくぼーし！」と答える。次のコマには木の幹の上にいる、三角帽子をかぶった小人のようなものが描かれている。

〈よつば〉が一体どのようなものとしてつくつくぼうしを考えているかについては、同じく4巻の第27話「よつばとつくつくぼうし」<sup>10)</sup>で描かれる。またこの話の中で〈よつば〉の誤解が解かれる場面も描かれる。第27話は〈よつば〉の見た夢の場面から始まる。〈よつば〉は夢の中で夏の妖精「つくつくぼうし」になっていた。その姿は三角の帽子をかぶり大きな襟のついたワンピースを着て、手にはヒマワリの花が先端についた杖を持っている。

この夢を見た後目覚めた〈よつば〉が「つくつくぼうし」の格好を真似して、ふだん着ないワンピースを着て<sup>11)</sup>なりきりごっこをする。もちろんつくつくぼうしがセミであると知っている大人たちは〈よつば〉の普段と違う格好を見ても、〈よつば〉が何の格好を真似しているつもりなのか理解できない。

大人の理解が得られない理由を、〈よつば〉はまだ変装が足りないせいであると考え、隣家の三姉妹の長女〈あさぎ〉に妖精「つくつくぼうし」の三角の帽子として新聞でかぶとを折ってもらう。それをかぶっても理解は得られないままである。変装を完全なものにしようと、妖精「つくつくぼうし」の最後の特徴であるヒマワリを、〈よつば〉は〈あさぎ〉とともに土手まで取りに行く。ヒマワリを構えた〈よつば〉が何の格好をしているのか〈あさぎ〉が戸惑い気味に「な…//夏の妖精？」と答えると、〈よつば〉は「そう！」と肯定して、「つくつくぼうしです！」と種明かしをする<sup>12)</sup>。

これを聞いた〈あさぎ〉がつくつくぼうしがセミであることを〈よつば〉に言う。二人で木に止まって鳴いている本物のつくつくぼうしを見ることによって、〈よつば〉が新しい発見をする。

以降の話でつくつくぼうしについての話題が現れる場面が存在するが、そこでは〈よつば〉はつくつくぼうしがセミであることを了解している。

<sup>8)</sup> あずまきよひこ（2005）『よつばと！』4巻、アスキー・メディアワークス、p.73

<sup>9)</sup> あずまきよひこ（2005）『よつばと！』4巻、アスキー・メディアワークス、pp.95

<sup>10)</sup> あずまきよひこ（2005）『よつばと！』4巻、アスキー・メディアワークス、pp.163-190

<sup>11)</sup> 〈よつば〉はほぼ毎日Tシャツに半ズボンという格好であり、物語の中でスカートをはいていることはほとんどない。

<sup>12)</sup> あずまきよひこ（2005）『よつばと！』4巻、アスキー・メディアワークス、pp.184-185

### 3. 先行研究

『よつぱと!』における「セミ」に関する語の翻訳を分析する背景として、ドイツ、およびヨーロッパでのセミの認知度を先行研究から見る。ヨーロッパにおけるセミの分布と、文学文字テキスト『イソップ寓話』に登場するセミとその翻訳の二つの観点から見てゆく。

#### 3.1. ヨーロッパにおけるセミの分布

『ブリタニカ国際大百科事典』<sup>13)</sup>によれば、ヨーロッパに約10種類、イギリスに1種類が生息している。

また、『世界大博物図鑑』<sup>14)</sup>の記述によると、セミが鳴く時期と農作業期との重なりによるセミの象徴性や、セミを含めた鳴く昆虫をかごに入れて飼う習慣があるのは、地中海地方や南欧に限られている。イギリスでは、イングランド南部にごく少数生息しているだけで、一般にセミの存在はあまり知られていない。

また、プロヴァンス地方において昆虫の研究を行っていたファーブルの『昆虫記』の中にはセミの章がある。その中でラ・フォンテーヌによる『寓話』の中の「蟬と蟻」におけるセミの描写はでたらめであり、それは北の地方の人間が南国に住むセミを見たことも聞いたこともなかったからであると述べている<sup>15)</sup>。

ここから、ヨーロッパにおけるセミの分布は、イギリスの1種を除くと、ほとんどが南欧に集中しており、フランス南部に生息するものが北限であると考えられる。つまり、ヨーロッパ中部のドイツにおいては、セミはまったくなじみのない虫であると言える。

ドイツよりおおむね南方に位置するフランスであっても、野村(1999)によると、「まさにここでは蟬は実際の蟬でなく、せいぜいが「鳴く昆虫」という意味しかないのであろう。パリの人間にとって蟬はその程度のイメージしか喚起しなかった。」<sup>16)</sup>とされている。さらに、パリに住む人々が実際のセミを見たことがなく、セミがどのような昆虫であるか語のレベルでもセミを認識できていなかったことが指摘されている。

とにかく南欧を除くヨーロッパの人々にとってセミは、あまりなじみがない虫であるというのは確かなようである。

#### 3.2. 文学作品におけるセミ

ヨーロッパにおけるセミの認識を反映する文学作品として、今回は『イソップ寓話』より「セミとアリ」を用いる。これは日本では「アリとキリギリス」として知られている話であるが、もともとはアリと対比される虫はキリギリスではなくセミであった。

元は古代ギリシアの奴隷であったイソップが語ったと言われる寓話を、後年様々な人がそれぞれの言語で編纂し、またそれが翻訳されて現代にまで残っている。この受容と変遷については小堀桂一郎による『イソップ寓話—その伝承と変容』に詳しいが、本論では特に「セミとアリ」に登場する昆虫がセミからキリギリスへ変更された経緯について見てゆく。

<sup>13)</sup> ブリタニカ・ジャパン、『ブリタニカ国際大百科事典』、ブリタニカ・オンライン・ジャパン、<http://japan.eb.com/>。(参照 2015-11-09)

<sup>14)</sup> 荒俣宏編(1991)『世界大博物図鑑 第1巻 [蟲類]』平凡社

<sup>15)</sup> 野村正人(1999)「蟬はどこへ行った：ラ・フォンテーヌ、イソップ寓話の形象化」、『東京農工大学人間と社会』10、pp.125、東京農工大学

<sup>16)</sup> 野村、前掲書、p.124

『イソップ寓話』の「セミとアリ」において、セミがギリギリに置き換えられた最初の出版物として、小堀（1978）は、1480年ごろに出版されたと推定されるシュタインハーヴェル編『イソップ』を挙げている。編者のシュタインハーヴェルは、ドイツの文芸復興を推進した人文主義者の一人である。このシュタインハーヴェル版『イソップ』は15世紀までに流布していたイソップ寓話を集大成したものである。この本の出版より少し早く、プラヌーデス編纂ラヌツウオ羅訳、俗称レミキウス本が出版されている。これはゲーテンベルクによる活字印刷技術の発明と普及に刺激を受けたものと考えられ、出版は成功した上に翌々年には再版されている。この編纂版より大規模でかつ優れた編纂版として、シュタインハーヴェル版『イソップ』が流通することになった。

この『イソップ』の構成の最大の特徴は、中世に広く行われていたようにラテン語文字テキストを主体とし、それにシュタインハーヴェル自身による忠実なドイツ語訳を添えてあることである。この構成は、もともと民衆的なものであるイソップ寓話を再び民衆の手に取り戻そうという提案にも似た試みであった。さらにこの『イソップ』がヨーロッパ各国語に翻訳刊行されたことは、この提案に対して期待通りの反応であったと小堀は考察している。そして、「セミとアリ」におけるセミの消失は、このシュタインハーヴェル版のドイツ語翻訳に関係していると小堀は指摘している。

セミからギリギリへの変更は、シュタインハーヴェル版で生じたという。ラテン語原文ではセミを表す„Cicada“となっているのを、併載したドイツ語翻訳ではコオロギやギリギリを表す„Grille“としてある。小堀は、この変更は誤訳ではなく意図的な置き換えであり、セミの実物を知らないドイツ語圏の読者のために、夏に鳴く虫としてなじみのあるギリギリに変更したのであろうと推測している。さらに、初版本の挿絵にも明らかにギリギリに見える昆虫が描かれているという。

野村（1999）はシュタインハーヴェル版より後に様々な言語に翻訳されたバージョンについて、挿絵から見た分析を行っている。

シュタインハーヴェル版を底本とした、1480年代のジュリアン・マショーによるフランス語訳でも挿絵はギリギリが描かれている。しかし、訳語はセミを指す„sigale“になっている。

このマショー版を底本にして英訳され15世紀に広く流通したキャクストン版があり、ここでも挿絵にセミではなくギリギリが描かれている。翻訳語自体はセミを表す„sygalle“が当てられている。この二つの翻訳版の翻訳語選択は、ラテン語版を参照しているためではないかとしている。

キャクストン版を参考に行っていると考えられる、チャールズ・スティックニーとトマス・ジェームズによる英語訳版では、„grasshopper“、つまりギリギリとなっている<sup>17)</sup>。これは、それまでの版の語ではなく挿絵の影響を強く受けたためではないかと推測している。

さらに、日本においてもこの話は「セミとアリ」ではなく「アリとギリギリ」として

<sup>17)</sup> イソップ寓話が初めて日本語に翻訳された『伊曾保物語』では原典に忠実にセミとアリになっているが、このトマス版の英訳を元にした「アリとギリギリ」が小学校の国語や修身教科書に掲載されたことによって、日本ではセミからギリギリに置き換わったまま定着したものと小堀、野村による指摘がある。

定着している。その理由として、野村は明治期に入ってきたトマス版を参考にしたせいではないかとしている<sup>18)</sup>。

このような混乱は、セミへのなじみのなさが、キリギリスとの姿の混同から単語自体の混同まで引き起こしていることの証左ではないだろうか。

『イソップ寓話』のヨーロッパ各国語版のセミの翻訳語の変容、また挿絵に描かれるセミの姿は以上のようなものである。セミとキリギリスは「鳴く昆虫」という同じ特徴でくられ、その区別に注意を払われることもなく、さらには混同されてしまうということが分かった。これは、セミになじみのない文化に属する翻訳者や挿絵画家、読者の持っているセミ、あるいはキリギリスへのイメージから翻訳語選択の問題が生じていると考えてよいだろう。

ヨーロッパにおけるセミの分布と、「セミとアリ」の翻訳からヨーロッパ中部におけるセミへの「なじみのなさ」の状態は以上のようなものであった。これをふまえ、『よつばと!』における翻訳語の選択について考える。

#### 4. 本論

『よつばと!』における「セミ」に関する単語の出現は、大きく3つの場面に分かれている。①1巻第6話「よつばとせみとり」におけるセミ捕りの場面、②4巻第27話「よつばとつくつくぼうし」における、〈よつば〉のつくつくぼうしに対する誤解とその解消が描かれる場面、③5巻第32話「よつばとあめ」における、〈よつば〉の勘違いが正されたことを前提とした〈とーちゃん〉との会話の場面である。それぞれの場面において、セミに関する単語がどのようなドイツ語に置き換えられているか、また単語の削除や代名詞による置き換えなどの操作について実際の例から分析する。

##### 4.1. 第6話における訳語の選択

セミが出現する場面の、第6話におけるセミは、„Grille“ (コオロギ、キリギリス) という単語で翻訳されている<sup>19)</sup>。タイトルの「よつばとせみとり」が、ドイツ語版では„MIT YOTSUBA! GRILLEN FANGEN“ (よつばと! セミ捕り) と翻訳されている<sup>20)</sup>。文字テキストの中でも一貫して„Grille“がセミの翻訳語として使われている。

<sup>18)</sup> 野村、前掲書、p.129

<sup>19)</sup> „Grille“は「コオロギ、キリギリス」を指すのだが、本稿で扱う例文では一貫して「セミ」の訳語として扱われている為、対訳では「セミ」と訳出する。コオロギを指す場合の翻訳例については、注61も参照のこと。

<sup>20)</sup> 『よつばと!』のタイトルは、「!」が新しい発見を指しており、それぞれの章タイトルではその話のテーマとなるものを「!」の記号の中に文字を配置するレイアウトにすることで示している。ドイツ語版では、„mit Yotsuba“ (よつばと) の後に„!○○“と表記することで代替している。

(1)

- a) 「セミすきか!?”<sup>21)</sup>
- b) „Magst du Grillen?“<sup>22)</sup>  
(セミはすき?)

(2)

- a) 「セミって始めてとりましたー」<sup>23)</sup>
- b) „Ich hab vorher noch nie eine Grille gefangen.“<sup>24)</sup>  
(私、今までセミって捕ったことなかったです)

先行研究で見たように、セミになじみのない地域ではセミとキリギリスはイメージのレベルでも単語のレベルでも混同されがちである。ドイツ語にはセミを指す„Zikade“という単語があるが、ここではキリギリスを表す„Grille“が選択されている。これは、ドイツ語版読者にとってよりなじみのある単語が選択されたためと考えられる。

日本語版にはセミという単語があるのに、ドイツ語版では文脈上指示語で置き換えられている例がある。逆に、日本語版ではセミという単語がない文字テキストにおいて、ドイツ語版で„Grille“が補われて翻訳されている例もある。

(3)

- a) 「よつばがとったセミだ」<sup>25)</sup>
- b) „Ich hab eine gefangen!“<sup>26)</sup>  
(私は一匹捕まえたよ)

(4)

- a) 「よつばもとるー!!」<sup>27)</sup>
- b) „Ich will auch eine Grille fangen!“<sup>28)</sup>  
(私もセミ捕りたい!)

さらに、この第6話では、捕ったセミの具体的な種類名を文字テキストに含んでいる箇所がある。ドイツ語版では、„groß“（大きい）という形容詞を使って差別化したり、または„Exemplar“（例、個体）という単語を使ってセミ捕りの獲得物として扱ったり、セミの中の種類の違いではなく文脈中で特定化するための表現に変更している。

21) あずまきよひこ (2003) 『よつばと!』 1巻、アスキー・メディアワークス、p.176

22) Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 1, TOKYOPOP, S.176

23) あずまきよひこ (2003) 『よつばと!』 1巻、アスキー・メディアワークス、p.189

24) Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 1, TOKYOPOP, S.189

25) あずまきよひこ (2003) 『よつばと!』 1巻、アスキー・メディアワークス、p.194

26) Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 1, TOKYOPOP, S.194

27) あずまきよひこ (2003) 『よつばと!』 1巻、アスキー・メディアワークス、p.189

28) Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 1, TOKYOPOP, S.189

(5)

- a) 「おー おめでとう あぶらぜみだ」<sup>29)</sup>  
 b) „Sehr gut, Glückwunsch. Schönes Exemplar.“<sup>30)</sup>  
 (よくやった、おめでとう。いい個体だ)

(6)

- a) 「クマゼミだ！ クマは今日それ一匹だけだ！ 一番大きいぞ」<sup>31)</sup>  
 b) „Geradezu gigantisch. Das ist die Größte heute! Freu dich!“<sup>32)</sup>  
 (まさに巨大だ。これは今日で一番大きい奴だ！喜べ！)

(7)

- a) 「くまぜみとったんだー すっげーでけー」<sup>33)</sup>  
 b) „... hab ich eine riesige Grille gefangen. So groß wie Jumbo!“<sup>34)</sup>  
 (でっかいセミ捕ったんだ。ジャンボみたいに大きかった！)

また、セミが„Grille“と翻訳されているのを反映して、文字テキスト中に出てくれば遊びにも変更がみられる。

セミ捕りに行くことを突然決めた〈よつば〉が自宅に戻り、〈とーちゃん〉とちょうど遊びに来ていた〈とーちゃん〉の友達、〈ジャンボ〉に「せみとりだ！」と宣言する。宣言する割にはセミ捕りについて何もわからない〈よつば〉を見かねた〈ジャンボ〉が「セミ捕り名人」を自称し、セミ捕りについていてくれることになる。この場面におけるジャンボの文字テキストは以下のようにになっている。

(8)

- a) 「いいかよつば 俺はセミを捕らせたならプロ級だぜ//略してセミプロだ」<sup>35)</sup>  
 b) „Aber nehmt Euch in Acht, Majestät! Erblasst nicht vor meiner göttlichen GrillfangTechnik! // Nannte man mich doch seinerzeit den Grill-Meister!“<sup>36)</sup>  
 (しかし、ご注意くださいませ、陛下！ 私の神がかつたセミ捕りテクニクの前に真っ青になるでしょう！かつての私は人呼んで「グリルマスター」！)

この言葉遊びは、日本語版では昆虫の「セミ」と「半分」などの意味を表す接頭語の「セミ-」を掛けたものである。ドイツ語版では、セミの訳語として使っている„Grille“と肉焼き器、ひいてはドイツの夏の風物詩である野外でのバーベキューを指す„Grill“を掛け、

<sup>29)</sup> あずまきよひこ (2003) 『よつばと！』 1巻、アスキー・メディアワークス、p.189

<sup>30)</sup> Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 1, TOKYOPOP, S.189

<sup>31)</sup> あずまきよひこ (2003) 『よつばと！』 1巻、アスキー・メディアワークス、p.195

<sup>32)</sup> Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 1, TOKYOPOP, S.195

<sup>33)</sup> あずまきよひこ (2003) 『よつばと！』 1巻、アスキー・メディアワークス、p.202

<sup>34)</sup> Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 1, TOKYOPOP, S.202

<sup>35)</sup> あずまきよひこ (2003) 『よつばと！』 1巻、アスキー・メディアワークス、p.180

<sup>36)</sup> Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 1, TOKYOPOP, S.180



„Grill-Meister“、つまり日本風に言えば「焼肉奉行」とでも訳せそうな単語に変更して言葉遊びを表現している。

イディオム的な表現として„Grillen fangen“自体も、„Grille“「気まぐれな考え」と取り、「ふさぎの虫に取りつかれる」という意味があるのだが、この「よつばとせみとり」を通して、昆虫としての„Grille“を„fangen“（捕る）という言葉通りの意味として使っているので、混同しないためにこの部分の言葉遊びで使わなかったとも考えられる。

„Grille“という単語が翻訳の文字テキストから削除されたことによって、文脈が分かりづらくなっていると考えられる場面があるので触れておく。

〈よつば〉がセミ捕りに行くことを思い付いたきっかけとなる、隣家の綾瀬家における綾瀬家の〈かーちゃん〉との会話の場面である。みんなでスイカを食べながら暑い暑いと言う〈かーちゃん〉に対して、〈よつば〉がクーラーをつけないのかと尋ねる。〈かーちゃん〉は「必要ありません」とびしゃりといった後、「窓開けてるとセミの声も聞こえるし//風鈴も鳴るし……夏らしくていいのよ」と弁解する。その後、〈よつば〉と〈かーちゃん〉でセミが好きかどうかという会話をし、突然セミ捕りをすることを宣言する<sup>37)</sup>。この場面の〈かーちゃん〉の文字テキストから、セミに関する内容が丸ごと削除されてしまっている。

(9)

a) 「窓開けてるとセミの声も聞こえるし//風鈴も鳴るし……夏らしくていいのよ」<sup>38)</sup>

b) „Ja, der kühle Wind ist angenehm. Und Windspiel passt so schön zur Jahreszeit.“<sup>39)</sup>

(そう、涼しい風を入れてるの。それから風鈴が季節によく似合うのよ)

この(9)の後に(1)の文字テキストが続く。(9b)では全くセミについて言及していないので、直後に来る(1b)の文字テキストで突然セミの話題が出てくることになる。ただし、これは文字テキストのみを追った場合の話で、一応(9)と(1)の文字テキストの間には、〈よつば〉が窓にかかった風鈴と、窓の景色を眺めるイラストに、セミの鳴き声のオノマトペをかぶせたコマが差し挟まれている。セミの鳴き声が描き込まれたこのコマを見て、ドイツ語版読者も〈よつば〉がセミの話題を連想したものと考察することも可能かもしれない。

しかし実際は、セミの鳴き声は翻訳されていない。『よつばと!』においては、一部の例外を除いて、コマの中に描き込まれたオノマトペは、日本語の表記をそのまま採用している。音写との併記やドイツ語に置き換える翻訳などが行われていない<sup>40)</sup>。そのため、ひらがなやカタカナが読めないドイツ語版読者にとっては、描き込まれたオノマトペは解読不能の記号でしかない可能性が高い。また読むことができたとしても、セミの鳴き声になじみのないドイツ語版読者にとっては、そのオノマトペが何を表すのか理解できない可能性もある。したがって、やはり(1b)でセミの話題が唐突に現れることとなる。この部分の

<sup>37)</sup> あずまきよひこ (2003) 『よつばと!』 1巻、アスキー・メディアワークス、pp.175-177

<sup>38)</sup> あずまきよひこ (2003) 『よつばと!』 1巻、アスキー・メディアワークス、p.175

<sup>39)</sup> Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 1, TOKYOPOP, S.175

<sup>40)</sup> このオノマトペに関する翻訳方針が変更されるのは、2011年に刊行された10巻からである。

文字テキストにおいてセミに当たる„Grille“を削除してしまったのは、文脈をとらえるうえで障害となりえる変更になってしまったと考えられる。

このような、単語の削除による翻訳の変更については、後の項で他の例からも考察する。

また、オノマトペの理解と、「セミ」というモノに関する理解については、次項でも取り上げる。

第6話においては、„Grille“と言う単語をセミの翻訳語として使っていることが分かった。文の構造などの都合上、日本語版にはセミという単語があったにもかかわらず„Grille“で翻訳されていない場合や、逆にドイツ語版では„Grille“が補われて翻訳されている場合もあるが、本来セミを表す„Zikade“が出現することはなかった。また、セミの種類名が出てくる文字テキストにおいては、形容詞を付けて差別化したり、セミ捕りの成果物として抽象化された名詞を使ったりすることで表現していた。

単に„Grille“という語を使わないだけではなく、話題ごと削除してしまったせいで、ドイツ語版読者が物語の流れを理解しづらくなるのではないかと推測される翻訳例も観察された。これは、„Grille“という名詞自体を代名詞に置き換えたり、他の表現に置き換えたりすることで、文字テキストからは„Grille“という表現が消えたように見えても、セミを指す語自体は残っている他の例と比べ、文字テキストの中から語だけではなく内容自体が削除されてしまったために起こった齟齬であると考えられる。また、この例で問題となったオノマトペ翻訳と絡んだセミに関する単語の翻訳については、次項で扱う翻訳例で詳しく取り上げる。

#### 4.2. 第24話から第27話における訳語の選択

次にセミに関する話題が出てくるのは、第24話である。ここでは、買い物に行く途中の〈よつば〉と〈とーちゃん〉の会話の中で、特につくつくぼうしが話題に上がる。この場面で初めてつくつくぼうしが登場し、文字テキストの翻訳は以下のようにになっている。

(10)

a) 「つくつくぼうしがつくつくぼうしいってる」<sup>41)</sup>

b) „Die Zikaden singen.“<sup>42)</sup>

(「セミ」が歌ってる)

つくつくぼうしは„Zikade“ (セミ) と翻訳され、セミを指す„Grille“とは差別化してあることが分かる。

(10) に続く会話の中で、つくつくぼうしが鳴くと夏も終わる、と〈とーちゃん〉が言ったのを、〈よつば〉がつくつくぼうしは夏を終わらせるもので、昆虫ではなく夏の妖精のようなものであると勘違いしてしまう<sup>43)</sup>。この勘違いから、つくつくぼうしには昆虫と妖精の二つの意味が生まれる。そのため他のセミを表す„Grille“と差別化し、„Zikade“とい

41) あずまきよひこ (2005) 『よつばと!』 4巻、アスキー・メディアワークス、p.73

42) Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 4, TOKYOPOP, S.73

43) あずまきよひこ (2005) 『よつばと!』 4巻、アスキー・メディアワークス、p.73-74

う語で翻訳したものと考えられる。

つくつくぼうしが二つの意味を持った状態の第27話でも、つくつくぼうしの訳語は„Zikade“が使われている。

(11)

- a) 「それは私の思ったつくつくぼうしとちょっと違う」<sup>44)</sup>
- b) „Zikaden habe ich mir immer anders vorgestellt.“<sup>45)</sup>  
(つくつくぼうしでもっと違うものだと考えてた。)

(12)

- a) 「セミだよセミ つくつくぼうしはセミ」<sup>46)</sup>
- b) „So ähnlich wie Grillen. Zikaden sind ja auch Insekten.“<sup>47)</sup>  
(セミに似てるもの。つくつくぼうしも昆虫だよ。)

(11)、(12) で出てくるつくつくぼうしは、どちらも昆虫を指す。

日本語版の「つくつくぼうしはセミ」という文は、つくつくぼうしはセミの一種であるので、論理的に正しい。しかしドイツ語版においては、„Zikade“は、„Insekten“（昆虫）に属するものであり、„Grille“も同じく „Insekten“に属するという内容に変更されている。これは、日本語ではセミとツクツクボウシの関係は、セミの一種につくつくぼうしがいるというものであるが、ドイツ語では昆虫の種類に„Zikade“と„Grille“がいるという単語の対応関係の組み換えが起こっているためである。この組み替えから、この文字テキストの中のセミを„Grille“と翻訳すると、矛盾が生じることになる。代わりに、„Insekt“という種類を説明する部分が付与されている。

語の実際の意味からいうと、„Zikade“（セミ）と„Grille“（コオロギ、キリギリス）は明らかに別の昆虫である。しかし、ここまでの『よつばと！』の文字テキストの中では一貫してセミの訳語として„Grille“が使われてきており、「よつばとせみとり」の中でセミのイラストと„Grille“の語が結び付けられていること、そしてドイツ語版読者が文化的に„Zikade“と„Grille“の博物学的区別を重要視していないであろうから、この使い分けは妥当であると考えられる。

一方〈よつば〉の想像する妖精の「つくつくぼうし」も„Zikade“と翻訳されている。〈よつば〉の誤解が初めて描かれる場面、4巻の4コママンガ連作章、「よつばと4コマ」の翻訳は以下のようにになっている。

44) あずまきよひこ (2005) 『よつばと！』 4巻、アスキー・メディアワークス、p.186

45) Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 4, TOKYOPOP, S.186

46) あずまきよひこ (2005) 『よつばと！』 4巻、アスキー・メディアワークス、p.186

47) Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 4, TOKYOPOP, S.186

(13)

- a) 「つくつくぼーし!」<sup>48)</sup>  
 b) „Die Zikaden am Baum.“<sup>49)</sup>  
 (木に止まってる「つくつくぼうし」。)

特に昆虫の„Zikade“と区別する文脈では、説明を付与されている。

(14)

- a) 「つくつくぼうしです!」<sup>50)</sup>  
 b) „Zikade, die Waldfee!“<sup>51)</sup>  
 (森の妖精の「つくつくぼうし」だよ!)

妖精の「つくつくぼうし」は„Waldfee“（森の妖精）という単語で説明されており、この„Waldfee“という語で妖精「つくつくぼうし」を翻訳している場合もある。この第27話のタイトル「よつばとつくつくぼうし」も、ドイツ語版では„MIT YOTSUBA! WALDFEE“<sup>52)</sup>（よつばと森の妖精）と翻訳されている。これは、夏、あるいは森の妖精のとしての「つくつくぼうし」という〈よつば〉の勘違い及び解釈が物語で大きいテーマとして現れているためだと考えられる。

この„Fee“（妖精）という単語の根拠は、日本語版において〈よつば〉がなりきっている妖精の「つくつくぼうし」の格好を見て、何の真似か当ててみるよう言われた〈あさぎ〉が戸惑いながら答える「な…//夏の妖精?」<sup>53)</sup>であると考えられる。ドイツ語版でも„In dem Kleid siehst du tatsächlich aus wie eine Fee.“<sup>54)55)</sup>（着ると本当に妖精みたいに見えるやつ）という文字テキストがある。

一般的なセミは第27話においても„Grille“で翻訳されている。〈よつば〉がつくつくぼうしはセミだったという新しい発見を披露する場面で、〈よつば〉がセミの具体例として挙げているみんみんゼミは„Grille“になっている。

48) あずまきよひこ (2005) 『よつばと!』 4巻、アスキー・メディアワークス、p.96

49) Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 4, TOKYOPOP, S.96

50) あずまきよひこ (2005) 『よつばと!』 4巻、アスキー・メディアワークス、p.185

51) Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 4, TOKYOPOP, S.185

52) Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 4, TOKYOPOP, S.163

53) あずまきよひこ (2005) 『よつばと!』 4巻、アスキー・メディアワークス、p.184

54) Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 4, TOKYOPOP, S.170

55) この文字テキストの元の日本語版は「前 花キュービットになったのとかか?」であり、微妙にニュアンスが変わっている。「花キュービット」とは、以前家に余った花を片付けるために、町の人に花を配って回ったときに〈よつば〉が〈とーちゃん〉から任命された架空の職業。ワンピースの上にベストとエプロンをつけ、頭に頭巾をかぶり、背中に作り物の羽を背負っている。この格好をドイツ語翻訳版では抽象化して、„Fee“としたのであろう。

(15)

- a) 「セミ！ みんなゼミみたいな！」)
- b) „So wie Grillen an den Bäumen. Ich hab 's gesehen!“  
(木に止まっている、セミみたいなやつ。私見たんだ！)

ここからセミがすべて„Zikade“という単語で翻訳されるのではなく、つくつくぼうしだけが„Zikade“で翻訳されているのが分かる。

さらに、„Zikade“と„Grille“の差別化を行うのに、オノマトペ表現も使われている。『よつばと！』の中では珍しく、この両者の鳴き声のオノマトペの翻訳がされている部分がある。それを比較すると、別の鳴き声に翻訳されていることが分かり、鳴き方の違う別種の生き物であることが、物語の中で理解できるようになっている。

(16)

- a) 「じー じー」<sup>56)</sup>
- b) „Zirp! Zirp!“<sup>57)</sup>

(17)

- a) 「つくつくぼーし つくつくぼーし」<sup>58)</sup>
- b) „Zzziiih! Zzziiih!“<sup>59)</sup>

(16) の翻訳に関しては、実際のセミの鳴き声の部分ではなく、電柱に登ってセミの物真似をしている〈よつば〉の鳴き真似であるという点がやや一般性を欠くが、このオノマトペと結びつけられているのは„Grille“である。(17) は„Zikade“と結びつけられている。つまり、両者の鳴き声は別のオノマトペで翻訳されていることにより、„Zikade“と„Grille“の差別化のための理解補助として読むことができるようになっている。

以上の翻訳例から、②4巻第27話「よつばとつくつくぼうし」における、〈よつば〉のつくつくぼうしに対する誤解とその解消が描かれる場面においては、一般的なセミを表す„Grille“と区別するために、つくつくぼうしには„Zikade“を翻訳語として選択していることが分かった。オノマトペの翻訳を見ても、„Grille“と„Zikade“にはそれぞれ異なる翻訳がされたオノマトペが関連付けられている。『よつばと！』の特に初期の巻においてはオノマトペがほぼ翻訳されていない関係上、この表現の区別は特徴的なものと考えられる。また、„Zikade“と言う単語は、元の日本語版のつくつくぼうしと同じく、昆虫としてのつくつくぼうしと、妖精としての「つくつくぼうし」に共通して使われている。特に区別したい場合は、„Insekt“、あるいは„Fee“と言う単語を用い、説明を付け加えていた。

<sup>56)</sup> あずまきよひこ (2003) 『よつばと！』 1巻、アスキー・メディアワークス、p.32

<sup>57)</sup> Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd.1, TOKYOPOP, S.32

<sup>58)</sup> あずまきよひこ (2005) 『よつばと！』 4巻、アスキー・メディアワークス、p.96

<sup>59)</sup> Azuma, Kiyohiko (2007). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd.4, TOKYOPOP, S.96

(12) や (15) を見ると、単にセミを „Grille“、つくつくぼうしを „Zikade“ と対応させたというよりは、それぞれを別種の昆虫として扱っている。これは、もともとはつくつくぼうしはセミの一種なのだが、セミになじみのない文化を持つドイツ語では、訳語でそれを表すことができなかった。そのために、 „Grille“ の中に „Zikade“ が含まれるのではなく、同じ昆虫として „Grille“ と „Zikade“ を並列させるような表現を用いることによって、区別している。

#### 4.3. 第30話から第32話における訳語の選択

最後に、③ 5 巻第32話「よつばとあめ」における、〈よつば〉の勘違いが正されたことを前提とした〈とーちゃん〉との会話の場面におけるセミ、及びつくつくぼうしの翻訳を見る。第30、32話では、前の項で取り上げた二つの場面よりセミの話題の比重は軽く、セミを含む文字テキストも限られている。

第30話「よつばとやんだ」で、折り紙で遊んでいる〈よつば〉が〈とーちゃん〉にセミを折ってもらう場面があり、文字テキストの中にセミが出てくる。

(18)

a) 「おー！ セミだ！ セミにしかみえない！」<sup>60)</sup>

b) „Oooh! Eine Zikade! Eine richtige Zikade!“<sup>61)</sup>

(おお！セミだ！本物のセミだ！)

(19)

a) 「セミちがう!!」<sup>62)</sup>

b) „Das ist keine Zikade!“<sup>63)</sup>

(セミじゃない！)

この場面ですでにセミは „Zikade“ と訳出されていて、セミが „Grille“ と翻訳されることは以降一切ない<sup>64)</sup>。

第32話では、雨の降っている日に、買い物に行くことになった〈よつば〉と〈とーちゃん〉が、だんだん涼しくなった来た天気について話している場面にセミが出てくる。〈とーちゃん〉が「もう夏も終わってきたかもな」<sup>65)</sup>と言ったのに対して、〈よつば〉は以下のよう

<sup>60)</sup> あずまきよひこ (2006) 『よつばと！』 5 巻、アスキー・メディアワークス、p.64

<sup>61)</sup> Azuma, Kiyohiko (2008). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 5, TOKYOPOP, S.64

<sup>62)</sup> あずまきよひこ (2006) 『よつばと！』 5 巻、アスキー・メディアワークス、p.65

<sup>63)</sup> Azuma, Kiyohiko (2008). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 5, TOKYOPOP, S.65

<sup>64)</sup> 『よつばと！』 9 巻p.109及びYOTSUBA&! Bd. 9, S.109において、こおろぎに対する訳語として „Grille“ が出現する箇所がある。

<sup>65)</sup> あずまきよひこ (2006) 『よつばと！』 5 巻、アスキー・メディアワークス、p.125

(20)

- a) 「つくつくぼうしががんばったな」<sup>66)</sup>  
b) „Die Zikaden singen auch nicht mehr.“<sup>67)</sup>  
(つくつくぼうしももうほとんど歌ってないな。)

ここではつくつくぼうしが„Zikade“と翻訳されている。

日本語版の〈よつば〉の文字テキストからは、つくつくぼうしがセミであることは理解しているが、依然つくつくぼうしは夏を終わらせるものであると勘違いしているように見える。それに対するドイツ語訳は、「つくつくぼうしがあまり鳴かなくなった」という内容にすることによって、日本語版より中立的な読みができる文字テキストになっていると考えられる。

ここまで見てきた„Grille“と„Zikade“の訳し分けから考えると、本来セミではない昆虫を指す„Grille“を使ってセミを翻訳していたのを誤訳であったとし、セミを指す本来の語である„Zikade“で統一するように変更したとはやや考えづらい。ただし、ドイツ語版『よつばと！』の4巻と5巻の刊行時期は約一年開いており、この間に翻訳方針の変更があった可能性もある<sup>68)</sup>。

„Zikade“には昆虫と妖精の二つの意味があることが、理解しづらいのではないかと考えられる文字テキストがある。

(21)

- a) 「つくつくぼうしセミで残念だったな」<sup>69)</sup>  
b) „Ja, schade, dass die Zikaden Zikaden waren und keine Feen, nicht?“<sup>70)</sup>  
(そうだな。残念だったな、「セミ」が「セミ」で、妖精じゃなくて。そうだろう?)

これは、〈よつば〉が夏を終わらせたつくつくぼうしをねぎらったのを聞いた〈とーちゃん〉が、以前の〈よつば〉の勘違いを引き合いに出す文字テキストである。

今までの翻訳語の選択をふまえ、セミは„Grille“、つくつくぼうしは„Zikade“と使い分けたとすると、昆虫の種類として„Grille“と„Zikade“が並列しているドイツ語では矛盾が生じることになる。そのため、この部分では„Grille“が現れていないのは妥当である。

(21b)の最初の„die Zikaden“は〈よつば〉の勘違いである妖精を指し、二度目の„Zikaden“は昆虫を指すと考えられる。この区別をより明確に表し、元の日本語の文字テキスト内容を再現しようとするならば、„Zikade“を説明した(12b)の表現を使って、„dass die Zikaden

<sup>66)</sup> あずまきよひこ (2006) 『よつばと！』 5巻、アスキー・メディアワークス、p.125

<sup>67)</sup> Azuma, Kiyohiko (2008). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 5, TOKYOPOP, S.125

<sup>68)</sup> 1~4巻までは元の日本語版の既刊がたまっていたこともあり、2007年の3月から3か月ごとに連続して刊行されている。次の5巻は約一年間開いた2008年7月に刊行される。以降は日本の既刊にだんだん追いついて、一年に1、2冊の刊行ペースになる。

<sup>69)</sup> あずまきよひこ (2006) 『よつばと！』 5巻、アスキー・メディアワークス、p.125

<sup>70)</sup> Azuma, Kiyohiko (2008). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 5, TOKYOPOP, S.125

Insekten waren“（「つくつくぼうし」は虫だ）とすればよいと考えられる。

しかし、後半の„und (dass die Zikaden) keine Feen (waren)“（カッコ部分は大塚が補完した。）（「つくつくぼうし」は妖精じゃない）という部分から、二度目の„Zikaden“は„Feen“と対比される昆虫を表すことが分かる。したがって、最初の„die Zikaden“は〈よつば〉の勘違いである妖精„Zikade“を指すものであると、この文だけで理解できると考えられる。

さらに、(21) に続く文字テキストは以下のようなものである。

(22)

a) 「なんで？/よつばセミすき」<sup>71)</sup>

b) „Warum? / Ich mag Zikaden.“<sup>72)</sup>

（どうして？私はセミが好き）

(23)

a) 「セミも妖精も同列か… なんだおまえ」<sup>73)</sup>

b) „Du stellst Zikaden und Feen auf eine Stufe? Na ja, von mir aus.“<sup>74)</sup>

（お前はセミと妖精を同等にみなすのか？まあいいや、好きにすれば）

ここでもセミが„Zikade“と翻訳されている。これは、(21) と同じくセミを„Grille“と翻訳すると矛盾が出てくる文脈のため、セミを„Zikade“と訳すことがむしろ妥当である。

(21b) で二度目の„Zikaden“を„Insekten“とするならば、(22b) 及び (23b) の„Zikaden“も„Insekten“に変更することになり、文脈が変わってしまう。そのため、(22b) は現状の翻訳でよいと考えることができる。また、(21b) の発言を聞いて、(22b) と返答することから〈よつば〉は„Zikade“が妖精ではなく昆虫であると理解し、つくつくぼうしに対する誤解が解けていることが示されている。③における翻訳語の選択変更から、〈よつば〉の新しい発見が表現されている。

また、前の項で文脈理解の妨げの原因として挙げられた、語の削除がこの場面でも行われている。〈よつば〉がつくつくぼうしがもうほとんど鳴いていないことを指摘している文字テキストのあるコマで、吹き出し外に書かれた文字テキストは以下のように翻訳されている。

(24)

a) 「セミなのになー」<sup>75)</sup>

b) „Das war so schön.“<sup>76)</sup>

（あれは素晴らしかったな）

71) あずまきよひこ (2006) 『よつばと！』 5巻、アスキー・メディアワークス、p.125

72) Azuma, Kiyohiko (2008). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 5, TOKYOPOP, S.125

73) あずまきよひこ (2006) 『よつばと！』 5巻、アスキー・メディアワークス、p.125

74) Azuma, Kiyohiko (2008). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 5, TOKYOPOP, S.125

75) あずまきよひこ (2006) 『よつばと！』 5巻、アスキー・メディアワークス、p.125

76) Azuma, Kiyohiko (2008). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 5, TOKYOPOP, S.125



この文字テキストは、日本語版では例文(18a)に続く文字テキストであり、前述の通り、つくつくぼうしは昆虫のセミであるが夏を終わらせることができるという〈よつば〉の勘違いがまだ残っていることを補強している。それに対してドイツ語版では、例文(20b)に続く文字テキストであるため、„das“(あれ)とは、セミの鳴き声であることが推測される。

この文字テキストでは、ドイツ語版ではセミと言う単語を削除し、さらに文字テキストの内容を変更して翻訳してある。内容をただ単に削除していた前の翻訳例とは異なり、文脈に合うように「セミ」に関する語のない文字テキストに変更してあるため、この場合は文脈理解の妨げは起こらないと考えられる。

この例から、セミという単語を削除したとしても、話題として残っていれば文脈がつながることが分かる。単語の削除と内容の変更は「セミ」に関する語に限らず、翻訳の際に行われることがある操作である。しかし、どのような場合に語の削除、内容の変更を行うと文脈理解の妨げになるかについては、本論では詳しく取り上げない。

これらの例からは、セミもつくつくぼうしも„Zikade“と翻訳されている。①、②の場面では、セミの訳語は„Grille“であったが、„Zikade“に変更された。

この部分以前では、意図的に„Grille“と„Zikade“を使い分けており、ドイツ語版文字テキストにおいてその使い分けがうまく働いていた。„Grille“と„Zikade“の関係は、日本語のセミの一種であるつくつくぼうしとは異なり、昆虫の中のそれぞれの種類として独立のものである。③の場面では、„Zikade“が持つ昆虫と妖精の意味の区別のみ必要となるため、„Grille“は文字テキストの中に現れない。„Zikade“の二つの意味の区別は、„Fee“との対立を付与することと、後に続く文脈によって理解可能となっている。

これ以降の『よつばと!』の物語においては、夏が終わり、季節が移り変わっていくためにセミは話題に上らなくなる。そのため、「セミ」に関する語の翻訳考察はここまでとなる。

## 5. 結論

本論では、『よつばと!』のドイツ語版における「セミ」に関する語を、物語の文脈に沿って分析した。その背景として、ヨーロッパにおけるセミの生息域と、『イソップ寓話』の「セミとアリ」における「セミ」の扱われ方を通じて、「セミ」に関する語とその認識を見た。

ドイツにはセミは生息していない。そのためドイツ語版読者にとっては、セミはなじみのない昆虫であることが分かった。

特に『イソップ寓話』における「セミとアリ」の翻訳からは、セミになじみのないヨーロッパの地域において、鳴く虫としてセミとコオロギ、キリギリスは明確に区別されず、セミがキリギリスに置き換えられていることが明らかになった。この置き換えは、『イソップ寓話』をラテン語・ドイツ語併記で編集したシュタインハーヴェルによってラテン語の„Cicada“が„Grille“とドイツ語訳されたことが元になっている。

『よつばと!』のドイツ語版においては、セミを„Grille“と翻訳している。日本語版においては、セミの具体的な種類の名前も文字テキストに含まれるが、形容詞を使うなどして

差別化している。先行研究から見たように、鳴く昆虫の中からドイツ語版読者にとって一番なじみの深い„Grille“を翻訳語として選択したのであろうと考えられる。

しかし、夏の終わりに鳴くことから夏を終わらせるものとして特徴づけられ、幼児の〈よつば〉によって妖精のようなものと勘違いされたつくつくぼうしは普通のセミと区別して翻訳する必要が生じる。実際の例を見ると、つくつくぼうしには„Zikade“と言う単語を用い、普通のセミを表す„Grille“と区別している。つくつくぼうしは、物語の中で昆虫を指す場合と妖精を指す場合があり、„Zikade“の場合でも同じである。昆虫を指す„Zikade“は、„Grille“と並列して„Insekt“（昆虫）の中の種類とされる。セミの中の種類につくつくぼうしがいるという日本語とは単語の対応関係の組み替えが行われている。この場合では、日本語ではセミの下位概念であるつくつくぼうしとそれ以外のセミという区別が、ドイツ語版では„Insekt“（昆虫）の下位概念である„Zikade“と„Grille“という区別へと、概念が一段階上がっている。妖精を指す場合の„Zikade“は„Fee“（妖精）という単語を用いて説明を付加している。

„Grille“と„Zikade“の訳し分けが必要とされなくなった場面では、セミもつくつくぼうしも„Zikade“で翻訳される。„Zikade“が持つ二つの意味の区別は、妖精を指す場合に„Fee“を付与することで行っていた。セミもつくつくぼうしも„Zikade“と翻訳することによって、〈よつば〉の誤解が解けたことも示している。

また、ドイツ語の文の構造や文脈上、セミと言う単語が代名詞に置き換わったり、逆に元の日本語版にはなかったセミに関する単語が補われて翻訳されたりする場合があった。これらの置き換え例の場合は大きく文字テキストの内容を変更するものではない。しかし、「セミ」に関する語の削除が行われる場合があり、「セミ」に関する話題自体が削除された文字テキストでは、文脈理解が妨げられるのではないかと考えられる翻訳例があった。

以上が本論で考察したセミに関する語の翻訳の実例分析の結果である。ドイツ語版読者にとってなじみのない「セミ」に関する語の翻訳では、以下のような特徴が見られた。i) 共通の特徴を持ち、よりなじみの深い別のものに置き換える。ii) 訳し分けが必要な場合、作品が理解しやすいように、選択された翻訳語の対応関係を変更し必要な説明を付与する。iii) 文字テキストの中から単語が削除されることもある。削除によって文脈理解が妨げられてしまう場合もある。

マンガ翻訳では、ドイツ語版読者にとってなじみのないモノが登場する場合がある。そして、『よつばと!』に限らず、他作品やアニメなどの他媒体においても、外国語版受容者にとってなじみのないものを翻訳する必要に迫られることになる。そのような翻訳者の配慮と読者の認識の程度が交錯している場で何が実践されているか、今後も引き続き分析してゆきたい。

#### 参考文献

- Azuma, Kiyohiko (2007-2013). *YOTSUBA&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, 1-11Bde, TOKYOPOP.  
 Britannica, „the *Encyclopædia Britannica*”, Britannica Academic, <http://academic.eb.com/>. (参照 2015-11-09)  
 TOKYOPOP <http://www.tokyopop.de/> (参照 2015-12-07)  
 あずまきよひこ (2003-2013) 『よつばと!』 1-12巻、アスキー・メディアワークス  
 荒俣宏編 (1991) 『世界大博物図鑑 第1巻 [虫類]』 平凡社

- 大塚萌（2015）「ドイツにおける日本サブカルチャー受容の変遷——日本マンガ『新世紀エヴァンゲリオン』における呼称表現の翻訳」、『人文社会科学研究』30、pp.158-176、千葉大学
- 小堀桂一郎（1978）『イソップ寓話—その伝承と変容』、中央公論社
- 小学館、『日本大百科全書』、Japan Knowledge、<http://japanknowledge.com/library/>（参照 2015-11-09）
- 谷出千代子（2013）「『イソップ寓話』 翻訳・翻案の特異性：“蟻と蟬の事” の事例検証から」、『仁愛大学研究紀要. 人間生活学部篇』4、pp.78-86、仁愛大学
- 野村正人（1999）「蟬はどこへ行った：ラ・フォンテーヌ、イソップ寓話の形象化」、『東京農工大学人間と社会』10、pp.115-132、東京農工大学
- ブリタニカ・ジャパン、『ブリタニカ国際大百科事典』、ブリタニカ・オンライン・ジャパン、<http://japan.eb.com/>。（参照 2015-11-09）
- 森井正史（2004）「イソップ寓話の変容：ラ・フォンテーヌの『蟬と蟻』について」、『京都光華女子大学研究紀要』42、pp.59-73、京都光華女子大学
- よつばスタジオ、<http://yotuba.com/index.html>（参照 2015-12-07）
- 渡浩一（2014）「イソップ寓話「アリとキリギリス」の日本の変容—『イソポのハプラス』における改変をめぐる」、『明治大学国際日本学研究』6(1)、pp.59-74、明治大学

セミに関する語を含む文字テキスト

例文	巻数	話数	ページ	話者	日本語版	ドイツ語版	特記
	1	1	33	よつば	セミ	Grille spielen.	
	1	1	33	風香	セミ…	Grille…	
	1	1	33	よつば	せみ!	Ja, Grille!	
	1	1	33	風香	そっかーセミかあー やっぱ夏はセミだよねえー	J... Ja, natürlich, Grille spielen. Wieso auch nicht. Ist ja Sommer, stimmt' s?	
9	1	6	175	かーちゃん	窓開けてるとセミの声も聞こえるし//風鈴も鳴るし……夏らしくていいのよ	Ja, der kühle Wind ist angenehmen. // Und Windspiel passt so schön zur Jahreszeit.	削除
1	1	6	176	よつば	セミすきか!?	Magst du Grillen?	
	1	6	176	よつば	よつばはすきだ!!	Ich mag Grillen!	ドイツ語にのみ
	1	6	176	かーちゃん	そうねー いいわよねーセミ	So? das ist schön.	指示語
	1	6	177	よつば	セミとりだ	Wir gehen Grillen fangen!	
	1	6	177	恵那	私セミ捕りなんかしたことはないよー?	Grillen fangen? Aber ich weiß gar nicht, wie das geht.	
	1	6	179	よつば	セミとりだ!!	Wir wollen Grillen fangen!	
	1	6	179	ジャンボ	…せみとり?	Grillen fangen?	
	1	6	179	ジャンボ	どーすんだ?	Wie willst du dann Grillen fangen?	ドイツ語にのみ
8	1	6	180	ジャンボ	いいかよつば 俺はセミを捕らせたらプロ級だぜ//略してセミプロだ	Aber nehmt Euch in Acht, Majestät! Erblasst nicht vor meiner göttlichen Grillfang-Technik! // Nannte man mich doch seinerzeit den Grillmeister!	ことば遊び
	1	6	180	ジャンボ	あそこいっぱいいるからな	Dort wird es eine Menge Grillen geben.	ドイツ語にのみ
	1	6	186	恵那	まじめにしてください	Wollten wir nicht Grillen fangen?	ドイツ語にのみ
	1	6	187	ジャンボ	いいかー 近づく時はセミからアミを隠す感じだ//奴らは目がいい	Hört zu. Wenn ihr euch den Grillen nähert, müsst ihr euer Fangnetz verstecken. // Grillen haben gute Augen.	
5	1	6	189	ジャンボ	おー おめでとう あぶらぜみだ	Sehr gut, Glückwunsch. Schönes Exemplar.	あぶらぜみ
2	1	6	189	恵那	セミってのはじめてとりましたー	Ich hab vorher noch nie eine Grille gefangen.	
4	1	6	189	よつば	よつばもとるー!!	Ich will auch eine Grille fangen!	ドイツ語にのみ
	1	6	190	ジャンボ	よつば セミは億病なんだ	Nicht so brutal, Yotsuba. Grillen sind ängstliche Tiere.	
3	1	6	194	よつば	よつばがとったセミだ	Ich hab eine gefangen!	
	1	6	194	恵那	大きなセミだねー	Und was für ein Prachtexemplar.	
6	1	6	195	ジャンボ	クマゼミだ! クマは今日それ一匹だけだ! 一番大きいぞ	Geradezu gigantisch. Das ist die Größte heute! Freu dich!	クマゼミ
	1	6	195	ジャンボ	んでどーする? このセミ	Jep, und was machen wir jetzt mit denen?	
	1	6	195	よつば	かーちゃん セミとったー!!	Mamaaa! Wir haben Grillen gefangen!	
	1	6	197	かーちゃん	あ おかえりー セミとれた?	Oh, schon zurück?! Hast du Grillen gefangen?	
	1	6	199	ジャンボ	俺 昔からセミ捕りは得意でー!!	Weißt du, ich bin ein richtiger Profi in Sachen Grillenfängen.	
	1	6	200	かーちゃん	セミが… セミが…	Grillen... Überall…	
	1	6	200	あさぎ	誰がこんなに捕ってきたの!?	Wer hat all diese Grillen frei gelassen?	ドイツ語にのみ
	1	6	201	よつば	かーちゃんくまぜみー	Schau mal. Groß, nicht wahr?	クマゼミ
7	1	6	202	よつば	くまぜみとったんだー すげーでけー	... hab ich eine riesige Grille gefangen. So groß wie Jumbo!	クマゼミ
	1	6	202	とーちゃん	へー クマ捕ったのか すげーな?	So groß wie Jumbo? Nicht schlecht.	クマゼミ
	1	6	202	よつば	そんでえなんちでもせみとりしてなーかーちゃんもおーよろこび! ジャンボがじんじにかえしていったー おわり	und dann haben wir bei Ena auch Grillen gefangen. Mama war auch total bekleistert! Und dann hat Jumbo sie wieder am Schrein freigelassen. Ende.	

日独比較文化から見る「なじみのないもの」の翻訳手法（大塚）

例文	巻数	話数	ページ	話者	日本語版	ドイツ語版	特記
	1	7	216	とーちゃん	昨日もよつばがセミがなんだーって言ってたけど 迷惑かけたでしょ？	Übrigens war Yotsuba gestern überglücklich über die vielen Grillen, die sie gefangen hat. Hoffe, es war nicht zu anstrengend.	
	2	11	96	よつば	つぎはー セミかケーキかなー	Und jetzt eine Grille oder eine Erdbeertorte...	
10	4	24	73	よつば	つくつくぼーしがつくつくぼーしいってる	Die Zikaden singen.	ツクツクボウシ
	4	24	73	とーちゃん	ああ つくつくぼーしだからな	Ja, es ist ihre Jahreszeit.	ツクツクボウシ
	4	24	73	よつば	つくつくぼーしがおわらすの？	Beenden die Zikaden den Sommer?	ツクツクボウシ
	4	24	73	とーちゃん	あいつが鳴くと夏が終わっちゃうんだよ	Wenn diese Zikadenart zu singen anfängt, neigt sich der Sommer dem Ende entgegen und der Herbst kommt.	ドイツ語にのみ
	4	24	73	よつば	へーすごいなー	Die sind ganz schön gut, die Zikaden, oder?	ドイツ語にのみ
	4	24	87	よつば	ふーか つくつくぼーしがないたらねー//なつがおわるんだよ	Wusstest du, Fuuka, dass, wenn die Zikaden singen... // ... der Sommer zu Ende geht?	ツクツクボウシ
	4	24	87	よつば	まだないてた	Die Zikaden.	ドイツ語にのみ
	4	24	88	よつば	…つくつくぼーしきらいか？	Magst du diese Zikaden nicht?	ツクツクボウシ
13	4	休憩	96	よつば	つくつくぼーし！	Die Zikaden am Baum.	ツクツクボウシ
	4	25	110	よつば	つくつくぼーしか!? なつおわるからか!?	Weil die Zikaden singen? Weil der Sommer zu Ende geht?	ツクツクボウシ
	4	27	164	よつば	つくつくぼーし つくつくぼーし	Die Zikaden singen ihr Sommerlied...	ツクツクボウシ
	4	27	165	よつば	つくつくぼーし//つくつくぼーし	Zikaden... // Zikaden...	ツクツクボウシ
	4	27	171	よつば	つくつくぼうし	Einer Zikade!	ツクツクボウシ
	4	27	171	とーちゃん	むう…つくつくぼうしか……… それか…	Einer... ..Zikade! Wieso das denn?	ツクツクボウシ
14	4	27	185	よつば	つくつくぼうしです！	Zikade, die Waldfee!	ツクツクボウシ
	4	27	185	よつば	つくつくぼーし つくつくぼーし	Zikade, Zikade...	ツクツクボウシ
	4	27	185	よつば	こうやってつくつくぼうしはなつをおわらすんだよ たぶん	Und so beende ich den Sommer... Bestimmt.	ツクツクボウシ
	4	27	185	よつば	つくつくぼーし つくつくぼーし	Zikade, Zikade...	ツクツクボウシ
11	4	27	186	あさぎ	それは私の思ってたつくつくぼうしとちょっと違う	Zikaden habe ich mir immer anders vorgestellt.	ツクツクボウシ
12	4	27	186	あさぎ	セミだよセミ つくつくぼうしはセミ	So ähnlich wie Grillen. Zikaden sind ja auch Insekten.	ツクツクボウシとセミ
	4	27	186	よつば	あさぎのはどんなの!?	Wie sehen deine Zikaden aus?!	ドイツ語にのみ
	4	27	189	よつば	つくつくぼうしは//セミでした	Zikaden... // ... sind Insekten!	ツクツクボウシとセミ
	4	27	190	とーちゃん	つくつくぼうしってあれだろ？ 今よつばがしてるかっこの	Du bist eine Zikade. Zumindest bist du als solche verkleidet.	ツクツクボウシ
	4	27	190	よつば	ちがうの!! ちがったの!! セミなの!! ないてた!!	Nein, nein. Das ist alles falsch! Zikaden sind Insekten. So wie Grillen!	
	4	27	190	ジャンボ	それつくつくぼうしだったのか	Als Zikade verkleidet?	ツクツクボウシ
15	4	27	190	よつば	セミ! みんなゼミみたいな!	So wie Grillen an den Bäumen. Ich hab's gesehen!	みんなゼミ
18	5	30	64	よつば	おー! セミだ! セミにしかみえない!	Oooh! Eine Zikade! Eine richtige Zikade!	セミ
19	5	30	65	よつば	セミちがう!!	Das ist keine Zikade!	セミ
20	5	32	125	よつば	つくつくぼうしがんばったなー	Die Zikaden singen auch nicht mehr.	
24	5	32	125	よつば	セミなのになー	Das war so schön.	削除
21	5	32	125	とーちゃん	つくつくぼうしセミで残念だったな	Ja, schade, dass die Zikaden Zikaden waren und keine Feen, nicht?	
22	5	32	125	よつば	なんで? よつばセミ好き	Warum? Ich mag Zikaden.	セミ
23	5	32	125	とーちゃん	セミも妖精も同列か… なんだおまえ	Du stellst Zikaden und Feen auf eine Stufe? Na ja, von mir aus.	セミ